栃木・長原東遺跡

1　所在地　栃木県栃木市田村町
2　調査期間　一九八二年（昭57）七月～八月
3　発掘機関　栃木市教育委員会
4　調査担当者　山ノ井清人
5　遺跡の種類　集落跡
6　遺跡の年代　奈良～平安時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

長原東遺跡は、栃木市の東方を南流する思川の右岸沖積低地上に位置する集落跡である。また、本遺跡の南東約一kmの位置には下野国府政庁跡が所在する。

発掘調査は、小学校校庭拡張工事に先がけた緊急調査である。

検出遺構は、八世紀中葉から一〇世紀に及ぶものであり、竪穴住居跡一二軒・井戸跡四基・土壙二〇基等である。

出土遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦・鉄製品（鎌）の他、木簡・井戸枠・木器（曲物及び底板・木盤）・自然遺物（粟の毬・ヒョウタン）などである。

木簡は、二基の井戸跡（ＳＥ一一・三〇）から他の木器や自然遺物と伴出している。

井戸ＳＥ三〇は、一辺約二・六mの隅丸方形の掘方を持ち、底部付近には井戸枠（内法一辺約五六㎝）が遺存している。伴出遺物は、数十片の木片と八世紀中葉頃の特徴を持つ土師器杯形土器である。

井戸ＳＥ一一は、一辺約三・二mの隅丸方形の掘方を持ち、底部には角材を井桁に据えただけの簡単な井戸枠が遺存している。伴出遺物は、ヒョウタンと九世紀代の特徴を持つ土師器杯形土器である。

8　木簡の釈文・内容

(1)　×□□」　(61)×19×3　011
(2)　「□□」　141×42×24　065

(1)はＳＥ三〇埋土上部から出土した木簡である。縦に二分しており、上端は折損しているが他の部分は完存している。木簡は全面丁寧な仕上げが成されており、下端部には、面を取るような削りが認められる。墨痕は鮮明であるが文字部が部分的に遺存するのみであるため、文字の判読は困難である。

(2)はＳＥ一一底面から出土した木簡である。角材の切端状のもの

に墨書したものである。文字は、墨痕も鮮明で完全な状態であるが、現在のところ判読できていない。

9　関係文献

栃木市教育委員会「長原東遺跡」（栃木県教育委員会『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』一九八二年）

（木村　等）

鹿の子C遺跡の調査報告書公刊される

多数の漆紙文書がみつかって、古代史研究者の注目をあつめた鹿の子C遺跡の発掘調査報告書が、財団法人茨城県教育財団から四分冊の大部の書物として公刊された。漆紙文書については本文編と図版編の二冊に収録されている。

『鹿子C遺跡』（茨木県教育財団文化財調査報告第20集）
遺構・遺物編（上・下）・漆紙文書本文編・漆紙文書図版編
発行所　水戸市南町三丁目四番五七号　茨城県教育財団

宮城・多賀城跡

1　所在地　宮城県多賀城市市川・浮島
2　調査期間　一九八二（昭57）六月～十二月
3　発掘機関　宮城県多賀城跡調査研究所
4　調査担当者　後藤秀一ほか
5　遺跡の種類　国府跡
6　遺跡の時代　奈良～平安時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

多賀城跡は古代陸奥国府跡であり、奈良時代には鎮守府も併置されていた。遺跡の大部分は仙台平野の東北端に位置する標高二〇～五〇mほどの小丘陵上の西端に立地しているが、外郭南辺・西辺の一部は標高約四mの沖積地にも及んでおり、特徴的な占地状況を呈している。外郭は一辺八〇〇～一〇〇〇mほどの不整方形をなし、そのほぼ中央に周囲を築地で区画した東西一〇六m南北一一六mの政庁跡がある。調査の結果、政庁跡にはⅠ～Ⅳ期の変遷が把握され、出土遺物等の検討より、各期の年代は次のように考えられている。第Ⅰ期はは多賀城の創建期で八世紀前半～八世紀中頃、第Ⅱ期は八世紀中頃～七八〇年の伊治公呰麻呂の乱による焼失まで、第Ⅲ期はその復興～八六九年の貞観の大地震による被災まで、第Ⅳ期はその